

「星をもつ少年の話。」

お元気ですか？枇杷の実る季節も終わり、もう夏ですね。

目下、私は空の人です。夜間飛行。窓の外には星空があります。知らない星の群れですが、道標のように行く手を照らしています。私はワインを飲み、それでもうまく眠れず、こうして手紙を書いています。

飛行機に乗っていると、少しだけ死を想います。

体が地上を離れていると、意識までもがいつもは辿り着けない場所を漂うのでしょうか。そしてたぶん、手帳に挟んである一枚の写真のせいです。(この封筒にもその写真のコピーを入れておきました。)

透明なピンクに包まれたブルーの、やわらかな靄のようなものを写した写真。貴方はこれが何か知っているのでしょうか？ピントを誤った宝石やみずうみにも見えますが、ちがうのです。

これは、星。星が死ぬ瞬間を、ハッブル宇宙望遠鏡が捉えたもの。

この写真をくれたのは、私の小さなお友達、テングルくんです。

「テングル」とは、彼の祖国の言葉で「天空」を意味するそうで、なんとも壮大な名前です。そして砂漠に不時着した飛行士が王子様の物語に魅せられたように、私はこの少年に惹かれたのです。

そう、貴方にテングルくんがくれた星の話をししましょう。

ある朝目覚めると、食堂の向かいの草地に見慣れぬ光景がありました。

一晩のうちに生えたきのこのような、白くて円いテント。

風に踊る青い旗には「Le cirque de l'étoile」、「星のサーカス」と書かれていました。

「夏になると、彼らはいつもやってきます。風のようにやってきては町に祝祭をもたらし、ある日前触れもなく去っていく」

ホテルの女主人がそう教えてくれました。私は大きなカフェオレポウルを手でかかえ、温かな湯気の向こうに揺れるテントを見守っていました。

「ねえ、君はどここの国の人？」

テングルくんと私が会ったのは、この日の夕方のこと。私は図書館からの帰り道。草地に面した通りを歩いていました。

マロニエの木に灯りをとり付けていたサーカスの一団から、弾けたボタンのように飛び出してきて、少年は私に声をかけたのです。

アーモンド形の瞳。黄色い肌。僧侶のように刈り込んだ形の良い頭。すばしっこい小さな体。西洋人ばかりで構成された一座の中で、少年の容貌はちょっと人目をひくものでした。

「日本人よ。あなたは？」

すると彼は、明らかに落胆の色をのぞかせて、

「そうか、モンゴルかと思ったんだけどなあ」

とため息をつきました。

「君は僕の国の人たちによく似ているね。だからといって、自分の星を持っていたりはしないんだろうね」

私は思わず目を見張りました。星みたいに巨きなものを人が所有するなんて、思いもしなかったのです。少年は草を食んでいる馬達を呼び集め、ブラシをあてながら話してくれました。

自分達を「天の民」と呼ぶモンゴル人には誰でもひとつ、自分の星があるのだということ。その証拠に、おじいさんが亡くなったとき、大きな星がひとつ流れたこと。自分にも遊牧民の父親が与えてくれた星があったのだけれど、生活が苦しくなりサーカスに入ってから、草原で暮らしていた時のように星を見られなくなってしまったこと。

「でも、だいじょうぶ。ぼくには馬達がいるし」

少年は白い馬の背中をなでながら、私に背を向けたまま、言いました。

「明日の夜、ショーを見にきてよ。ぼく、うんとがんばるよ」

次の日、私は約束どおり客席にいました。

テントの壁は一面青いベルベットの幕に覆われ、星座の形に縫いつけられたスパンコールは夜空を想わせるきらびやかさ。円形の舞台を囲んで点在するベンチには、うわさを聞きつけて集まった町の人々がひしめきあっていました。ポップコーンの匂い。子どもたちのおしゃべり。あちこちでフラミンゴの羽根のように揺れる綿飴のピンク色……。わいわい、がやがや。大人も子どもも、短い夏の魔法にかかったように浮かれていました。

喧騒を鎮めたのは、白い馬を従えて登場したテングルくんが鳴らす、鐘の音でした。

ゆったりとした服に身を包んだ少年は、厳かな儀式のように舞台を一周しながら鐘を鳴らし続けました。それだけでも観客の眼は、東洋の神秘をまとった少年に釘づけになってしまいました。やがて舞台の中央に着いたテングルくんは、地面に鐘を据えると指を額にあて、天と地に祈りを捧げるような仕草をしました。それから、ひらりと白い馬の背に身を踊らせはじめたテングルくんの曲芸を、私は何と譬えればよいでしょうか。

テングル君と愛馬は、静かなオペラのアリアにのせて踊りはじめたのです。

風のように疾走する馬の上で宙返りしたかと思うと、巧みに馬を操りくるくと輪を描いたり。滑らかにステップを踏んだり。半人半獣のケンタウロスを想わせるテングルくんの身体はしなやかで、神々しいほどでした。

なだらかな起伏を描く腕の美しさは、山の稜線のそれと同じでした。瞳は、星。馬の跳躍がもたらす風には、草と土の匂いがありました。おそらくあの踊りは、テングルくんが生まれた緑の大地に捧げられたものだったのでしょうか。その後が続いた火食い男の曲芸も空中ブランコもかすんでしまうほど、それは見る人の魂をふるわせるような、素晴らしいものだったのです……。

「やあ、来たね。星のサーカスへようこそ」

終演後、私を見つけた彼は、すっかり十歳の子どもに戻っていました。満面の笑顔で、私が手渡したフラミンゴ色のお菓子をほおばり、言うのでした。

「もっと星が見られるいい場所、ぼく見つけたんだ。来週の水曜日、ぼくには半日お休みがある。一緒に行こうよ。きっと君も、気に入るから」

それから水曜日まで。私は毎晩サーカスのテントに灯る明かりを確認しながら、わくわくしている自分を発見しました。テングルくんの踊りが、私の中に眠れる遊牧民の心を揺り動かしたからかも知れません。

私は、テングルくんを喜ばせてあげたくなったのです。このサーカスの子どものように安息の地を見つけられなかった、幼い頃の自分を抱きしめるような気分で。

バスと地下鉄を乗り継いで向かった博物館の最上階には、プラネタリウムがありました。その日は季節の星を紹介するおきまりプログラムに加え、「ハッブル宇宙望遠鏡が捉えた星の世界」と銘打たれた特別プログラムが上映されていました。

昼間のプラネタリウムは閑散としていて、静かでした。お客は私達のほかに、若いカップルが一組。あとは夏休みの課題研究に訪れた様子の子どもくらいのものでした。わざわざ昼間から好んで星を見ようという人は、そう多くはないものです。

すり切れたソファに身を沈め、テングルくんは嬉しそうでした。時々幸せな溜息をもらしたり、こっそり甘いものを食べながら、クラシックの音楽にのって紹介される「季節の星」に見入っていました。

「ぼくの星、見つけたよ。パッファロー座のはしっこにある小さな星なんだ。ぼくの心と響きあうから、すぐ見つけられるんだ」

映写の途中、彼は私の耳元で、そっと教えてくれました。やさしく窪められた手の中には、宝石のようなドロップが覗いていました。

5分の休憩を挟んで始まったのは、「ハッブル望遠鏡が捉えた星の世界」でした。「宇宙の膨張を発見した天文学者にちなんで名づけられたハッブル望遠鏡は、地球の600km上空を漂っています。1994年、シューメーカー・レヴィ彗星が木星に衝突した様子を捉えたのは、皆さんもご存知でしょう。宇宙空間に浮かぶこの望遠鏡のおかげで、新たな宇宙の姿が浮かび上がってきました」映し出されたのは、やわらかなヴェールのような光に包まれた星々の姿でした。

ブルーに、ピンクに、燃えるような金色に。それはさながら、生きている宝石でした。「これは、ハッブル宇宙望遠鏡が死んでいく星を捉えた有名な映像です。鮮やかな色は、寿命を終えた星が放出するガスが燃えてできるのです。そして死んだ星から放たれたガスや鉱物のかけらはやがて寄り集まり、また新たな星が生まれるのです」

星が、死ぬ。私はその事実に、胸を貫かれるような衝撃を受けました。

「ああ、死ぬ時でさえ、星はこんなにきれい。きらきらしている。星の骸は、やがて生まれる卵なんだ」と。

上映後、誰もいなくなった空っぽの席で、私とテングルくんは魂を抜かれたようにぼうつとしたまま座っていました。

「すごいものを見たね」

私は目をしばたかせながら、テングルくんに声をかけました。

「うん。星が死ぬってあんなにきれいなんだね。ぼく、知らなかった」

テングルくんの目には、きれいな涙がありました。

「あんな風に死んでいくのは、新しい命の誕生を祝っているからなんだ。あれは星の聖誕祭なんだよ」

今日という日の記念にと、私は売店でいくつかの写真を買ってプレゼントしました。

「ありがとう。今日君をさそったのはね、君の中にぼくと同じ星があるのを感じたから。だからなんだよ」

テングルくんは丁寧にお辞儀をして言いました。

その帰り道、私達は静かでほとんど言葉を交わさずにいました。それぞれの胸のうちに漂う想いを一滴もこぼさぬようにと、思っていたのかも知れません。

それから間もないのある朝、目覚めるとテントは草地から消えていました。

「ああ、彼らなら明け方まだ暗い時間に去っていききましたよ。ひづめの音がしましたからね」
パリッとした白いシャツに身を包んだ給仕人は、ごく当たり前のようにはいきました。

私は慌てて朝食を飲み込み、草地へと走りしました。

テングルくんとはあれ以来会っていなかったし、さようならも言っていなかったのです。

草地はやはり、空っぽでした。名残を感じさせるものは、テントのあった形に円く身を伏せている草ばかりでした。

そして、もうひとつ。マロニエの木に、一通の手紙が吊るされていました。葉っぱに留められていたリボンを外すのももどかしく、私は封を切りました。

差出人が誰かは、わかっていました。

「君のなかにある星を大切に。また会う日まで。テングル」

メッセージはたったそれだけ。そしてあのプラネタリウムで買った、死んで逝く星の写真が添えられていました。それは、テングルくんが一番気に入っていたはずのものだったのに。

貴方への手紙に同封したのは、その写真なのです。死んでいく星であり、生まれる星。

今、夜空を見ながら私は思います。

テングルくんの星は、貴方の星は、私の星は、どこにあるのだろうか。

この空にひしめく幾千、幾万の星。そのひとつひとつが誰かの星であり、私達はそれぞれに、たったひとつの星の光を胸に棲ませながら生きているのだ、と。

小さな自分が巨きなものと繋がっているということは、なんと心づよいことか。

そう想うと私もテングルくんのように、祈りを捧げたいのです。

今夜は星に見守られながら眠りましょう。おやすみなさい。また手紙を書きます。